

私の話はこういうものだ。

ンツイニムワチョンゴの村で大昔に起こったことだ。ンツイニムワチョンゴに、ムフングリエ・ワ・ムツインザという、とても頭のいい男がいた。この男は力と知力で生きていた。彼の仕事はココヤシの葉で屋根を葺くことだった。もうひとり、ムツアラという、とても力のある男がいた。彼の強さといったら、ンツイニムワチョンゴの若者に命じて、彼の耕作地を耕しに行くよう命じることが出来たほどだった。ムツアラは朝、畑に出かけた。彼は青バナナ、マニョック、甘イモを栽培し、それらを一緒に集めてからおいしいバーベキューを作った。しかし、彼と一緒に耕作に来た人々を招いた時には、彼はバナナを摘んでそれを折り、耕すために彼が通る道に捨てるのだった。そして若者たちがいるところには捨てなかった。いつもこのような有様だった。彼らは畑を日暮れまで耕し、それから村に下りた。そして彼らは、ムツアラが[畑の]端の 10 メートルか5メートルを耕し、そこに座ってバナナや甘イモの皮をむき食べているのを見た。

或る日若者たちは言った。

「この人のことがわからない。この人のやり方は厳しくて、彼の畑仕事に我々を誘っておきながら、帰りには自分だけ採ったものを食べている。我々が通るところには何も食べるものがないだろう？」。

そこで、ムフングリエが彼らに言った。

「爪を落とさない者は、熟していないものを危険に陥れる者だ。ムツアラは結局は勝つだろう」。

或る金曜日、人々が金曜の祈りから出てきた時、ムツアラが告げた。

「明日は土曜だ。畑に行く」。

ムフングリエはモスクを出て畑に上った。彼はムツアラが耕そうとしている場所を調べに行った。土曜日になって彼らは畑に出かけた。ムフングリエは座っていて、ココヤシの屋根を織り始めたが、以前は畑から戻って夜の間しか屋根を織らなかった。彼は言った。

「今日は、何があるかとムツアラの畑には行かない。彼はわがまま過ぎるからだ。だが、そこに行く君たちは、どうやって行くか知っておいた方がいいだろう。奴の弱み(お守り)はムンガ・ウンボの中にある」。

実際は、畑にあるレモンの木で、彼はそこに境界線を置いていた。そこに、彼は畑で食べるバナナを隠していたのだった。耕しに行く人々がいたが、そのうちのひとりが言った。

「今日は、私か、またはムツアラだ。奴は雨を持っているし私は太陽を持っている。今日は彼の前に居座るつもりだ。だから、出発しよう。私も行くが、彼の前に通るつもりだ。彼の弱点はムンガ・ウンボにあるのだ」。

何人かがわかっていたのは、ウンボに置かれていたのがレモンで、食べ物(バーベキュー)はレモンの木の後ろにあった。その人は朝とても早く出たが、ムツアラが既に着いているのを見た。彼は既にバーベキューをして、目印の中にそれらを隠していた。そしてその人は、ムツアラの前を通過して座り、耕し始めた。ムツアラはじっと葉を見て動かさず、尋ねた。

「あいつは上で何をやっているんだ？」。

「耕しています」。

「そんなことはない。私は上ってくるあえぎ声は聞いてない。あえぎ声というのは下ってくるもので、上ってくることはない」。

「それじゃ何を考えているかわかりません」。

そして、若者は耕し続け、甘イモを見つけた。彼は座って甘イモの皮をむいて食べ始めた。ムツァラは頭を上げて、麦藁帽子を被った、座って食べている人を見つけた。

「この人は何をしているのだ？」。

「彼は放っておきなさい。バナナの葉以外には隠されているものはないし、そのうち去るでしょう」。彼らはその人のことは放っておいてから、ムフングリエに会いに行き、彼に言った。

「ムツァラは我々に 100 枚の屋根を持って来るよう頼みました。彼の家に載せるために」。

「ムツァラに言いに行け。私ムフングリエは蔓を付けては歩かないのだと。ココヤシの屋根が欲しくて彼の屋根をそれで葺きたいのなら金を持って来いと。そうでなければいても仕方がないと」。

ムツァラのバーベキューを食べた者については、最後のお祈りの後に裁定がなされることになった。それから、他の者はムフングリエが言ったことを公共の広場まで伝えてムツァラが着くのを待った。彼が着くと人々が言った。

「お前の家の屋根は既に取り除かれ、我々はムフングリエのところに屋根を取りに行った。そうしたら彼は答えた[私は蔓を付けては歩かない。屋根が欲しいのなら先に金を払え]」。

ムツァラはモスクに座りに行き、考え込んだ。すると他の者たちが同じ夜に屋根を力づくで取り戻し、ムツァラの家の方にそれらを置いた。ムツァラは考え始めた。

「どんな裁定が最初に、私のバーベキューを食べた者とムフングリエの間で行われるかわからない。明日の日曜日まで放っておいて、米を植えに行き、その後でムフングリエをどうするか決めよう」。

そこには老婆がいてムツァラに言った。

「もし裁定があるとすれば、それはお前のバーベキューを食べたものについてであって、払わなければ屋根をお前にやらないことにしたムフングリエについてではない」。

ムツァラは思った。

「これはどういうことだ。何と言うこともない老婆までが私の首を取りに来た」。

老婆は続けた。

「お前は、やったことか、言ったことでへまをやってしまったのだ」。

このことについて彼はまったくわからなかった。彼は他の人々に言った。

「米を植えに行き、最後のお祈りの時に戻ってきて、ムフングリエを火あぶりにしよう。それには何人かが、彼の宿営地に行き、大きな溝を掘り、網を被せる必要がある。ムフングリエがそこに落ちたら、縛って海まで連れて行き、投げ込むのだ」。

ムフングリエ自身も大層強かった。前日の老婆がムフングリエのところにやって来て伝えた。

「ムフングリエ、今日がお前の最後の日だ。ムツァラは手下を準備して、大きな溝を掘り、お前をそこに落として縛り、海に投げ込むつもりだ」。

彼は答えた。

「海のどこに私を連れて行くのか知っている。最初に来るのはムツァラだから私は彼の後について行く」。

ということで、他の者たちは出発し、溝を掘り、それを覆い、葉陰に行き、身を隠し、ムフングリエを

待って、彼を溝に落とし海に投げ捨てる機会を窺っていた。老婆がムフングリエに伝えたように、彼は先回りをして他の道を通った。それから彼は宿営地の高みに、もうひとつ溝を掘り、それを覆い、宿営地の真ん中に行き座った。彼はそこに留まり、皆は彼が出てくるのを待っていると、ムツアラが宿営地の上から下りてきた。彼はムフングリエの宿営地の高いところから来て叫んだ。待っていた連中は隠れ場所から出てきた。彼らはその時思った。

「ムフングリエの力は別として、ひとつ気がかりなことがある。多分、彼は魔除けを持っている。自分の宿営地から出る時、来る時は下の方を通っているのに、今日は彼は上に向かって通って行った。いずれにしても、針は仕立て屋を傷めようとし、その終わりは今日だ」。

ムツアラは上の方から下りて来たが、溝に落ちてしまい、叫んだ。他の者たちは叫びを聞いて、ムフングリエが罨に落ちたと思った。彼らはやって来て網で縛り、大きな袋に入れて、ムフングリエを捨てに行くのだと思い込み、海岸までやって来て、ムツアラを海に放り込んだ。ムツアラは水の中でもがきながら言った。

「私の力をお前たちは今日見るだろう。私は死ぬがそれはお前たちと私の間でのことだ。お前たちは何もすることは無いし、何も話すこともない。お前たちは私を罨にかけてしまったが、お前たちの最後を見ることはないだろう。お前たちが海に投げ込んだのは、私ムツアラなのだ」。

これで私の話はおしまい。